SeijoUniv.

Curator Course NewsLetter

成城大学学芸員課程ニュースレター

Newsletter from Curator COURSE of Seijo University

MARCH 31. 2025

vol. 09

CONTENTS

§ 1 - 巻頭言 「道を迷っていたら」
成城大学文芸学部准教授　安永拓世

§ 2 - 学芸員名鑑第８回「地域とともに」
山梨県立博物館 学芸員　丸尾依子

§ 3 -「シンポジウム「学芸員の仕事　その魅力と面白さ」を振り返り」
東海大学准教授　篠原聰、横浜市歴史博物館 学芸員　吉井大門

§ 4 - 編集後記

《江戸時代中期のものと推測される人形用衣装》
天津司の舞保存会蔵（山梨県立博物館寄託）

POINT

学芸員課程カリキュラム

学芸員資格取得要件（文芸学部生のみ対象）

成城大学で学芸員資格を取得するためには、まず学芸員課程に登録し、各種ガイダンスに出席したうえで、①と②を満たす必要があります。

①「必修科目」19 単位、「選択科目」を２系列以上にわたって８単位以上修得

② 学部を卒業（学士の学位を取得）する

大学院生の場合は、①を満たした時点で資格が取得できます。

なお、「必修科目」のうち、博物館実習については、学内での講義のほか、博物館や美術館等で実習を行う必要があります。

※詳細は文芸学部「履修の手引」を参照してください。

・学芸員資格取得までの流れ

1年次 → 2年次 → 3年次 → 4年次

1年次

学芸員課程登録説明会
３月

博物館学芸員課程費
5,000 円納入

2年次

学芸員課程科目の履修登録（3年次に「博物館実習」を履修するためには、学芸員課程必修科目のうち「博物館概論」および「博物館教育論」を含む８単位の修得が必要）

博物館実習先開拓ガイダンス
（10 月～ 11 月）

博物館実習先の開拓

博物館実習 次年度履修許可者発表（３月）

3年次

学芸員課程科目の
履修登録

4年次

学芸員課程科目の
履修登録

学芸員資格取得者発表
３月

学芸員資格証明書交付
（学位記授与式の日に
教務部にて配付）

学芸員資格取得の最大の関門となるのが博物館実習です。博物館実習先については、各学生の希望に基づき、学内選考や各館園での選考の後、決定されます。事前に様々な館園を訪問し、特色や展示方法等を学ぶとともに、履歴書の書き方や自己 PR、志望動機など事前に準備をしておきましょう。

令和６年度　博物館実習先館園

飯田市美術博物館　賀川豊彦記念松沢資料館　川崎市立日本民家園　古代オリエント博物館　埼玉県立近代美術館　埼玉県立さきたま史跡の博物館　静岡県立美術館　芝山町立芝山古墳・はにわ博物館　進化生物学研究所　世田谷区立郷土資料館　世田谷文学館　高松市美術館　たましん美術館　千葉県立中央博物館　東京国立博物館　東京都江戸東京博物館　東京都現代美術館　東京都多摩動物公園　東京富士美術館　栃木県立美術館　長野県立歴史館　新潟県立歴史博物館　日本民藝館　平塚市美術館　福島県立博物館　府中市美術館　北海道立帯広美術館　三重県総合博物館　山口蓬春記念館　山梨県立科学館

巻頭言

成城大学文芸学部准教授
安永拓世

道を迷っていたら

二〇二四年四月より、本学の文芸学部芸術学科に着任しました安永拓世と申します。現在の専門は日本美術史で、主に江戸時代の文人画の研究を進めているところです。大学では、日本美術史の講義や演習を、学芸員課程では、博物館展示論の授業を担当しています。かくいう私自身、今でこそ日本美術史が専門と自称していますが、大学時代からずっと日本美術史を研究してきたわけではありません。ことあるごとに、道を迷って進んできたら、いつのまにか、という感が強いのも事実です。ここでは、自己紹介がてら、そんな迷い道の話を、少しだけできればと思います。

学芸員という仕事に私が初めてあこがれたのは、中学二年生のころ。歴史小説や日本史が好きだったので、大学では、文学部に入り、日本史を専攻しました。ところが、広島出身の私が関西の大学へ通い、京阪神の博物館や美術館、寺社を見て歩くようになると、博物館や美術館に展示してある絵画や彫刻などの文化財を中心に扱う美術史という分野に、俄然興味が湧いてきたのです。それとともに、与謝蕪村という江戸時代の文人画家であり俳諧師であった人物にも惹かれ、日本文学の研究も知るようになりました。大学では、結局、日本史の文化史的なアプローチで、江戸時代中後期の煎茶趣味についての卒業論文を書いたのですが。

ただ、大学院への進学にあたっては、日本美術史の分野へ進むか、日本文学の分野へ進むか迷い、結局、日本美術史に進む選択をしました。というのも、蕪村の絵画の研究をしたいと考えたからです。修士論文では、蕪村の「鳶・鴉図」という作品を題材に、絵画と文学の関係を読み解くことを試み、さらに、博士後期課程に一年間在籍してから、和歌山県立博物館に就職することになりました。

和歌山県立博物館での採用は、私自身が専門とする江戸時代の絵画ではなく、陶磁器・染織・金工・漆工などを扱う工芸担当の学芸員。初めて取り扱う工芸品も多く、迷いや苦労の連続でしたが、着任後三年目に担当したのが、熊野速玉大社の古神宝類を集めた展覧会でした。南北朝時代を代表する国宝に指定された工芸品を大量に扱った経験は大きく、今でも関連する仕事をいただく機会があります。その後、和歌山県立博物館では十二年勤め、江戸時代の絵画の展覧会から、染織の展覧会まで、大小の特別展を五回ほど担当しました。展覧会を通して、実際の資料や作品から直に学ぶ機会を得たことは、のちの研究にも大きな糧となっています。

次に転職した先は、東京文化財研究所。一九三〇年に美術研究所として設立された東京文化財研究所は、その名のとおり長い伝統を持つ公的な文化財の研究機関です。ここでは主に、売立目録という明治から昭和期に発行されたオークションカタログのデジタルアーカイブ化に携わりました。現場の学芸員から一転、デジタルアーカイブを進める研究員へ。アーカイブの作成は試行錯誤のくりかえしでしたが、モノが作られ伝わってきた意味を、現場とは少し離れた視点から、客観視することを学びました。同時に、絵画の基底材（下地となる素材）や彩色材料について、東京文化財研究所の保存科学や無形文化遺産など他分野の専門家と協力して研究がおこなえたことも、重要な成果です。

九年勤めた東京文化財研究所から成城大学へ来て一年目。思い返してみれば、専門といえる蕪村の絵画について大学で学んだのは、わずか三年ほど。蕪村の研究は、ライフワークとして長く続けていますが、和歌山県立博物館での学芸員経験や、東京文化財研究所での研究生活が、今の私の骨格を作ったといっても過言ではありません。学芸員や研究員という立場で、迷いながらも多様な専門分野の方々と一緒に仕事をできたことが、私自身を成長させてくれました。

ところで、大学にいるみなさんも、学芸員として勤めているみなさんも、おそらくさまざまな迷いに直面していることでしょう。何の専攻を選ぼうか、卒論では何をテーマにしようか、どんな展覧会を企画しようか、あるいは転職しようか、などなど。でも、迷ったからこそ、他分野のことを知るきっかけになるはずですし、答えは一つではありません。もし、大学で学芸員課程を学ぼうか迷っていたら、ぜひ履修してみてください。今は、学芸員にも多様性が求められています。迷いながら来た脇道の方が、むしろメインになるかもしれませんので。

地域とともに

山梨県立博物館 学芸員
丸尾　依子

山梨県博の畑にて

二〇〇二年四月、成城大学大学院博士課程前期を修了した私は、博物館建設準備のための事務局員（民俗担当学芸員）として山梨県教育庁に籍を置くことになった。当時の山梨県政は新規建設される博物館の是非が問われていた真最中で、山梨県立博物館（以下、山梨県博）の建設計画には、県民から厳しい目が向けられていた。おまけに、民俗展示はそれほど重視されていなかった。自分の存在を否定されたような、いじけた気持ちになったこともあった。山梨県博は二〇〇五年十月に無事に開館を迎えたが、そうした時期を越えて現在まで学芸員を続けてこられたのは、資料や事例の面白さもさることながら、それ以上に各地域の方々に教えられ、育てられ、支えられてきたからだと思っている。

山梨には、毎年春に行われる民俗芸能がある。残念ながら、県内ではあまり知られていない。山梨県博の常設展では、その民俗芸能で使う人形のレプリカを展示する計画があった。新人だった私は保存会長にアポイントメントを取り、上司二人をともない、手土産を用意して意気揚々と依頼に出掛けた。そして、上司とともに氏子総代にたっぷり二時間は叱られた。「博物館に宣伝なぞしてもらわずとも結構！」という一喝は、今も耳から離れない。

当時の私は何もわかっていなかった。その民俗芸能は村の始まりに関わるような伝承を持ち、近代以降は社会情勢や災害によって何度も中断を繰り返しながら、その度に復活をさせてきたという歴史があった。伝承者の方々がどれほど大切に思い守ってきたのか、受け継ぐ誇り、次代に伝えることの責任と重圧、地域内の意思統一の難しさ。それなのに、当時の私は、その芸能について文化財的な説明ができる程度の知識しか持ち合わせておらず、伝承の当事者の考え方を知ろうともしていなかった。ただ、新しく造る博物館の展示計画を業務として進めることを考え、保存会が展示計画を好意的に受け入れると信じて疑わなかった。成果を自分の実績にしたいという下心もあったかもしれない。思いあがった私に氏子総代が憤るのは当然である。伝承の最前線で苦労を重ね続けてきた氏子総代は、思いの温度差と居丈高な態度に愕然としたことだろう。

最終的に、レプリカ作製や展示用映像の撮影は許して頂いたものの、一喝に打ちのめされた私は何とか挽回の機会を得たくて、お祭りに毎年顔を出し、聞き書きや文献調査を行った。今、その保存会とはとても良好な関係を築いている。認めていただいたのが何時のことかはっきりとは思い出せないが、神事を見ることや、女人禁制だという神体に触れることも許された。二〇一三年には博物館で出張公演をしていただき、二〇二二年にはそれまでの調査成果を基に展覧会を企画し、ご神体の貸出しだけでなく展示作業にも多大なご協力をいただいた。それを機に、古い祭礼用具（人形用衣装【表紙写真】）を山梨県博にご寄託いただくことにもなった。さらに現在、保存会や地域住民の方々のご協力をいただきながら、二〇二六年三月に刊行予定の報告書作成事業が進んでいる。

この保存会との二十数年間を振り返る時、新人の頃に先輩学芸員から言われた言葉が身に染みてくる。「学芸員が扱うのはモノだが、モノの向こうには人がいる。学芸員は人を相手にする仕事」という内容だった。今の私がそれに加えて言うのであれば、相手にする人は同時代を生きる人だけではない、ということである。その土地に生きた過去の人々の思いも受け止め、時には未来を生きる人に願いや希望を託す。博物館が扱うモノやコトは、地域に積み重なっていく思いと行為の結晶や象徴でもある。長い時間のなかで、惰性的に守られてきたモノやコトなどひとつも無いのである。行われてきたコトには意味があり、地域の理論がある。守り遺されてきたモノには、守るべき理由と、遺そうという各時代の強い決意が込められている。それらを紐解いて明らかにし、地域文化として再定義し、過去と未来を繋ぐ手伝いをするのが博物館学芸員の仕事である。民俗担当学芸員であれば、これを避けることはできない。

あらためて文字にすると両肩が重くなるが、一方で、この仕事にはやりがいと喜びを感じてきた。展示や研究紀要を通じて山梨の民俗事例を紹介し、認知度が少しずつ上がってきたと感じる時、企画展会期中に地域の方々が誇らしそうな顔で友人知人を連れて博物館を訪れてくれた時、私はとても嬉しい。お祭りの追跡調査に出掛けた先で「丸尾さん、久しぶりじゃん！」と呼び止められ、調査に興味を示してもらえた時や、地域行事ついての相談ごとや困りごとを話して頼ってもらえた時は、一人の仲間や専門家と認めてもらえたことに少しだけ自分の成長を感じられる。小中学生が夏の自由研究のテーマに山梨県内の民俗を選び質問に来てくれた時、次代に伝える手伝いができることを誇りに思う。

今、私が後輩学芸員に伝えたいことは「『先生』や評論家にならないで」ということである。博物館活動で関わる各地域の方々とは、同じ目線で語れるようになってほしいと思う。博物館に籠らず地域に出てほしい。時には、地域の共同作業に参加することになるかもしれない。決して地域のためだけに滅私的に尽くせということではない。ただ、山梨県博のような地域博物館学芸員の仕事は、地域社会とそこに息づく地域文化あってこそのものであり、各地域の方々はそのまま来館者でもある。上澄みだけ掬い取ったような展示や研究、専門分野に偏った独善的な仕事ぶりは、簡単に見抜かれ信頼を失ってしまう。学芸員として調査研究と展示を行うためにも、地域の方々との地道な関わりや相互理解は欠かせない。それに博物館の仕事は、資料収集・調査研究・展示・普及事業と多岐にわたる。各地域には、さまざまな技術や知識をもったスペシャリストや、各所に顔が利く立場の方がいる。人脈を築いておくことは博物館活動の充実にもつながる。

私は、地域とともに活動する学芸員でありたい。博物館活動を地域に生きる方々とともにつくっていきたい。私の学芸員としての第一歩は、まぎれもなく、あの日の氏子総代の一喝から始まったのだと思っている。

展示作業に集まってくださった保存会員。国内外の研究者も調査のために立ち会った

シンポジウム「学芸員の仕事 その魅力と面白さ」を振り返り

篠原聰（東海大学）
吉井大門（横浜市歴史博物館）

本号で昨年のシンポジウムを振り返る機会を得た。二〇二三年九月三十日（土）に開催した「学芸員の仕事　その魅力と面白さ」と題するシンポジウムを開催し、本誌ではシンポジウムを振り返る。はじめに結論めいたことを言うならば、学芸員として活躍する本学卒業生の、等身大の仕事の魅力や面白さを伝えられたという点では大成功だったと思う一方、高校生向けのシンポジウムであったため、博物館・美術館の専門的職員である学芸員の仕事の専門性については、より突っ込んだ議論を展開できなかったことも確かである。いずれにしろ、企画段階から参加し、当日は司会を務めた立場から、同シンポジウムを振り返りたい。

ことの発端は本学の学芸員課程ニュースレターの刊行にまで遡る。成城大学の学芸員課程ニュースレターのパイロット版を発行したのは二〇一八年三月。成城大学の卒業生が全国各地の博物館・美術館で学芸員として活躍していることをもっと多くの方に知ってもらえるようなユニークな媒体をつくりたいとの想いで、本学卒業生の吉井大門さん（横浜市歴史博物館学芸員）と一緒に企画を立ち上げ、大学に相談したのがきっかけである。当時、学芸員課程を担当していた中野照男先生をはじめ、小島孝夫先生、岩佐光晴先生、そして教務部の方々の粘り強いご尽力のおかげで実現し、ニュースレターも本誌で九号を数えるに至った。

かねてよりこのニュースレター企画の一環として、卒業生の学芸員を招いたシンポジウムを開催したいと考えていたところ、パイロット版刊行から数えて五年目にあたる二〇二三年は、成城大学に学芸員課程が設置されてからちょうど五十年を迎える節目の年、奇しくも文芸学部創立七十周年を迎える記念すべき年でもあったため、この機運をとらえ、シンポジウムは実現した。場所は成城大学九号館二階データサイエンスクエア、会場設営をはじめ準備の段階から小澤正人先生には大変お世話になった。参加者は対面で三十名程度、オンラインで五十～六十名程度であった。なお、ニュースレター第八号はシンポジウムの配布資料としても活用すべく、登壇者の方々にご執筆いただいた（成城大学学芸員課程HPからダウンロードできます）。

シンポジウム当日も、ニュースレターのラインナップ通り、大城茉里恵さん（栃木県立美術館）、高橋真作さん（東京国立博物館）、玄蕃充子さん（文化庁）、田井慎太郎さん（DNP）の順で登壇いただき、司会は篠原と吉井がつとめた。私たちの力不足もあり、トップバッターの大城さんからタイムスケジュールがおしてしまい、最終的にはディスカッションを延長してしまい申し訳なかったが、それだけ、登壇者の方々はそれぞれ、自分の仕事について、時間も忘れて情熱的に話してくれたのだと思う。

終了後のアンケートでは

「学芸員の現状や仕事内容の魅力について、とても分かりやすくお話しいただき、理解しやすかった。また、魅力ばかりではなく、ご苦労についてもお話しいただけたことは大変よかったと思う」

「シンポジウムに参加し、現場で働く方の生の声を聴くことができ、大変有意義な時間でした。私は、現在大学で学芸員課程を履修中であるため、様々な知見を得ることが出来ました。また、近年増加傾向にあるデジタル展示などにも触れていただき、そちらにも興味の湧くきっかけとなりました」

「貴重なお話を聞けて、このシンポジウムに申し込んで本当に良かったと思いました。質問にも答えていただき、現職の方々の意見が聞けたおかげで自分の中に新しい考えが生まれました。二時間半があっという間でした。また、色んな立場で博物館に関わる仕事をしている方々の話を聞いて、こんな選択もあるのだと知ることができました。ぜひ第二回目も開催してほしいです」

といった感想のほかに、

「学芸員の働き先について知ることができてとても良かった。就職が大変であることも、イメージ以上で驚いた。その中で、企業で活躍されている方のお仕事内容は魅力的に感じた。キュレーターというと華やかなイメージ、学芸員というと地味なイメージで、これまで身近ではなかったが、技術開発の話はわかりやすく、また、身近に理解できるものであった」

「現在大学院生として、学芸員を目標に、美術館でインターンシップをやっています。しかし、就職活動が本格的に始まる時期に入り、一般企業と異なる業界へ向けて何をすればよいか分からず困っていました。その中で、ミュージアムの学芸員として、またそれに近い分野で働いている方々のお話を聞くことができて、今後の活動の中で何を考えるべきか、指針ができたように思います。学外の人間である私にこのような機会をいただけたことに感謝しております」

というキャリアに関するコメントも寄せられた。

オンライン参加者からも

「学芸員の仕事について聞く機会はなかなかないので、とても興味深く聞きました。一口に学芸員、また学芸員資格を有すると言っても仕事内容は様々で、専門知識や個性を活かして活躍している様子がよくわかりました。仕事としては柔軟に対応しつつ、個人的な関心への拘りも持ち続けていることが大事かと思いました」

「登壇者の方たちは、成城大学で培った学びを活かして、学芸員という仕事に使命感と充実感を持って向き合っている様子がリアルに伝わってきて大変面白く拝聴しました。特に大城さんと玄蕃さんの、作品を守り次の世代に継承していくための教育普及活動や保護の為の調査のお話が深く印象に残りました」

といったコメントを頂いた。

今後に期待すること

本誌パイロット版にはニュースレターを構成する五つの要素として、「学芸員名鑑」「名作異聞」「学芸員課程カリキュラム」「ミュージアムを外から考える」「いわゆる学芸員って」という大枠を考え、現役学芸員へのインタビュー、極私的オススメのミュージアムや資料・作品、学芸員課程のスケジュール、学芸員以外にもミュージアムに携わる仕事があること、学芸員の定義とは？といった内容で、博物館・美術館の学芸員の仕事が魅力に満ち溢れているのを伝えることを眼目としている。この五つの要素をやや強引に今回のシンポジウムに当てはめると、例えば「タネを蒔く仕事」と題し美術館の普及活動を取り上げた大城さんは「学芸員名鑑」に該当し、特別展の裏側の魅力や「人生を変える作品との出逢い」を語った高橋さんは「名作異聞」、「次の世代につないでいく仕事」として民俗資料の魅力やその保存の重要性を文化庁調査官の立場から紹介した玄蕃さんは「ミュージアムを外から考える」、最後の田井さんもここに含められるが、「未来のミュージアム体験にむけて」と題しデジタル技術やテクノロジーを駆使して新しい博物館体験をプロデュースしたいと語ったその内容は、これからの学芸員のあり方を問い直すことにもつながり、「いわゆる学芸員って」に当てはめていいだろう。冒頭で大成功だったと述べたのは、ニュースレターの企画意図とシンポジウムの眼目が合致していたからで、そのことは参加者のアンケートからも肯けるだろう。

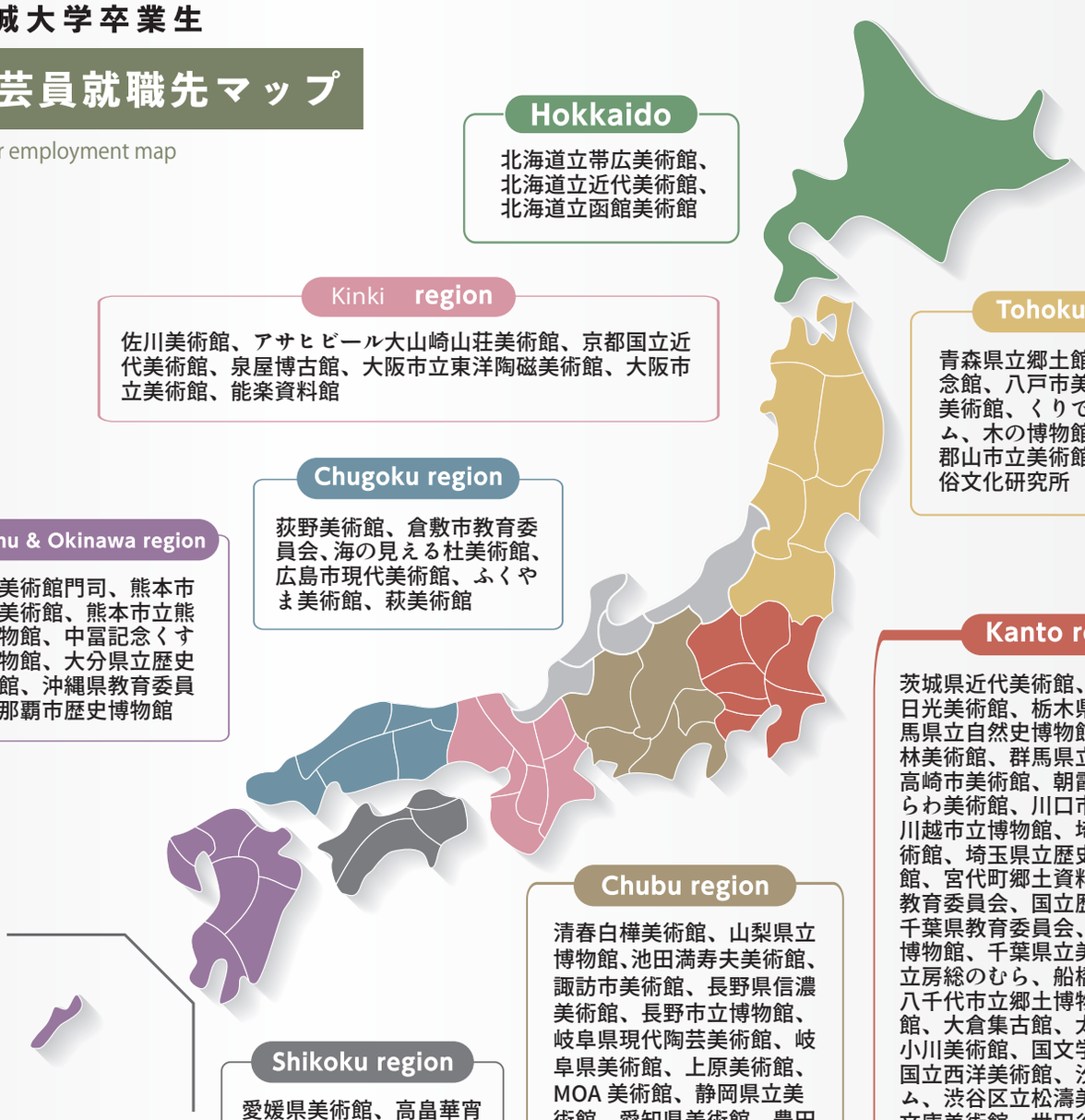
他方、アンケートのなかには「今回はそれぞれの学芸員が務める博物館の設置主体の違いに重きを置かれていたようでしたが、美術系の方に偏っていたため、歴史や民俗の人がもう一人くらいいても良かったと思いました。」との意見もあった。実は、企画段階では、学芸員の仕事の専門性を重視した内容とする案もでたが、最終的には高校生や親御さんをメインターゲットにした方針に決まったため、すべての参加者を満足させることができなかったのも確かである。その意味では、シンポジウム終了後に、喜多崎先生が「知られざる学芸員の仕事を一般向けに紹介することに大きな意義があった」と寄せてくださったコメントは、私たちを励ましてくれた。

今回のシンポジウムで果たせなかった学芸員の専門性については、その後、二〇二四年十一月三十日に成城大学で開催された、文芸学部創設七十周年記念事業「デジタル・ミュージアムの可能性―新しい管理・研究・鑑賞に向けて―」がその役割を引継ぎ、次のステップへと進めてくれたのではないだろうか。

成城大学卒業生

学芸員就職先マップ

Curator employment map



Hokkaido

北海道立帯広美術館、北海道立近代美術館、北海道立函館美術館

Tohoku region

青森県立郷土館、棟方志功記念館、八戸市美術館、宮城県美術館、くりでんミュージアム、木の博物館吉成銘木店、郡山市立美術館、みちのく民俗文化研究所

Kinki region

佐川美術館、アサヒビール大山崎山荘美術館、京都国立近代美術館、泉屋博古館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪市立美術館、能楽資料館

Kanto region

茨城県近代美術館、小杉放菴記念日光美術館、栃木県立博物館、群馬県立自然史博物館、群馬県立館林美術館、群馬県立歴史博物館、高崎市美術館、朝霞市博物館、うらわ美術館、川口市教育委員会、川越市立博物館、埼玉県立近代美術館、埼玉県立歴史と民俗の博物館、宮代町郷土資料館、我孫子市教育委員会、国立歴史民俗博物館、千葉県教育委員会、千葉県立中央博物館、千葉県立美術館、千葉県立房総のむら、船橋市教育委員会、八千代市立郷土博物館、出光美術館、大倉集古館、太田記念美術館、小川美術館、国文学研究資料館、国立西洋美術館、汐留ミュージアム、渋谷区立松濤美術館、静嘉堂文庫美術館、世田谷区立郷土資料館、世田谷区立次大夫堀公園民家園、泉屋博古館分館、タイムドーム明石（中央区立郷土天文館）、大東急記念文庫、たばこと塩の博物館、東京国立近代美術館、東京国立博物館、東京ステーションギャラリー、東京都江戸東京博物館、東京都写真美術館、東京都庭園美術館、東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館、日本書道美術館、ニューオータニ美術館、根津美術館、練馬区立美術館、八王子市郷土資料館、府中市美術館、ブリヂストン美術館、文化庁、松岡美術館、三井記念美術館、目黒区美術館、山種美術館、厚木市郷土資料館、神奈川県立歴史博物館、鎌倉国宝館、鎌倉市鏑木清方記念美術館、川崎市市民ミュージアム、川崎市立日本民家園、そごう美術館、松前記念館、玉川文化財研究所、横浜美術館

Chugoku region

荻野美術館、倉敷市教育委員会、海の見える杜美術館、広島市現代美術館、ふくやま美術館、萩美術館

Kyushu & Okinawa region

出光美術館門司、熊本市現代美術館、熊本市立熊本博物館、中冨記念くすり博物館、大分県立歴史博物館、沖縄県教育委員会、那覇市歴史博物館

Chubu region

清春白樺美術館、山梨県立博物館、池田満寿夫美術館、諏訪市美術館、長野県信濃美術館、長野市立博物館、岐阜県現代陶芸美術館、岐阜県美術館、上原美術館、MOA 美術館、静岡県立美術館、愛知県美術館、豊田市美術館

Shikoku region

愛媛県美術館、高畠華宵大正ロマン館、香川県立ミュージアム

★ 47 都道府県中 31 都道府県に就職（66.0%））

★面積カバレッジ 70.1％

※名称は卒業生の就職当時のものです。

【編集後記】

本号では、本年度より成城大学に着任された安永先生に巻頭言を、学芸員名鑑では民俗分野より山梨県立博物館の丸尾氏に、そして昨年度の 9 月に開催したシンポジウム「学芸員の仕事　その魅力と面白さ」について当日参加者のアンケートを交えた振り返り記事を編集委員より執筆させていただいた。本誌編集担当の篠原氏と他愛ない話のなかではじまった学芸員ニュースレターの企画は、2018 年パイロット版をいれると今回で通巻 10 号、正確な本誌 10 号は次号ではあるが、刊行に先立ち、そして今日までご尽力いただいている、成城大学の先生方、教務部のみなさま、また執筆いただいた成城大学出身の学芸員諸氏には、年 1 冊ないし 2 冊という緩やかなペースの刊行ではあるが、改めて感謝申し上げたい。ニュースレターに関わらせていただくなかで、学芸員とは今後どのように仕事をしていくべきで、どうあるべきかとったことを、業界の末端に身を置きながら、思い出すように考えるようになった。かといって答えが出るわけでもなく、業務をこなす日々である。ただミュージアムを通しモノを媒介にして知識や事実を得るのみではなく、モノを媒介として見る人同士がお互いの想像力と新たな感性を刺激しあうようなコミュニケーションを得られる場であればとふと思うことがある。何気ない一言すら揚げ足を取られ、埒外の範疇から心許ない言葉が飛んでくる昨今、モノの前、そしてミュージアムでは自由な言葉と交流を望みたい。（Y）

成城大学学芸員課程ニュースレター vol. 09
Seijo University Curator Course NewsLetter
発行：成城大学学芸員課程委員会　157-8511　東京都世田谷区成城 6－1－20
TEL 03－3482－9045　mail：gakugei_nl_s@seijo.jp
編集担当　吉井大門　篠原 聰　　2025 年 3 月 31 日 発行